

連続シンポジウム「分離派建築会誕生100年を考える」第5回  
The 5th symposium on the centennial of the birth of Bunriha Kenchiku Kai

分離派登場の背景に見る

Birth of Bunriha and Its Background:

# 建築教育と建築構造

Architectural Education and New Structural System

日時 2018年11月3日(土) 13:30—17:30

会場 東京大学 工学部1号館15号講義室

定員 100名(参加費無料/先着順)

開会  
加藤耕一(東京大学) *Koichi Kato*

## 第1部 各論発表

加藤耕一(東京大学)

分離派誕生の背景としての東京帝国大学:  
趣旨説明に代えて

角田真弓(東京大学) *Mayumi Tsunoda*

東京帝国大学における建築教育の再読

宮谷慶一(清水建設) *Keiichi Miyatani*

「構造」的側面と職能の問題

堀 勇良(元文化庁) *Takeyoshi Hori*

我国鉄筋コンクリート建築黎明期の諸問題

閉会

田路貴浩(京都大学) *Takabiro Taji*

## 第2部 ディスカッション

パネリスト

加藤耕一・角田真弓・宮谷慶一・堀 勇良

モデレーター

田所辰之助(日本大学) *Shinmosuke Tadokoro*

## 併設ホワイエ展示

内田ゴシックの詳細図(工学部2号館/安田講堂)

常松祐介(東京大学) *Yusuke Tsunematsu*

分離派建築会(1920年東京帝国大学卒業・結成)を、日本の近代建築におけるモダンデザインの鼻祖として位置づけ、彼らの活動全体を明らかにすることが、本連続シンポジウムの目的である。今回は、彼らの活動の基盤を作り上げた東京帝国大学の建築教育や、当時の建築技術および社会的な側面から、分離派建築会誕生の背景に迫る。

従来の研究では、彼らが学生時代を過ごしたこの時期、東京帝国大学の建築学科で意匠系科目と構造系科目の選択制が敷かれていたことに着目し、分離派建築会のメンバーを意匠派の側に位置付け、構造派との対立関係のなかで、彼らの活動のモチベーションや先進性が論じられてきた。

だが、この時代をこれほど単純な二項対立によって捉え、分離派をただ「意匠派」という括りで理解して良いのだろうか？ 今回のシンポジウムでは、東京帝国大学における建築教育の詳細を明らかにすると同時に、当時の教授陣が取り組んでいた建築にまつわる問題を見ていくことで、分離派誕生の背景を再考してみたい。

主催 分離派100年研究会

問合先 京都大学 田路研究室 (tajilab.kyoto@gmail.com)